

令和6年度 第2回舞鶴市教育環境の在り方懇話会 主な意見

【会議の目的】

- この懇話会は学校規模の適正化に関して具体的な政策を決定して、それを教育委員会に示すというものではない。子どもたちの学習権をどう保障して、舞鶴の教育環境をどう良くしていくか、委員はいくつか意見として教育委員会に投げ、事務局でしっかりとまとめていただくという位置づけである。地域住民としての思いやエゴではなく、先ず子どもたちと学校をどうするかをコンセプトとし、意見交換したい。

【小規模特認校制度について】

- 統廃合を防ぐためには小さな学校に子どもの数を増やす必要がある。小さな学校に子どもを直ぐに移動はできないが、小規模特認校制度は文科省の認可があれば特別に子どもをそこに集めることができる制度。必ずしもうまくいくかはバランスが難しい。メリットデメリットについてもう少し勉強していくとよい。京都府内でも実施している地域はある。
- 通学方法については補助金でバスやタクシーを使っている。いろんな形があり一概に言うことはできない。
- 共通認識を図るために小規模特認校制度の勉強会を調整したい。メリット・デメリットについて専門の見地から勉強の時間をとることが良いのではないか。

【ビジョンの案・概要への意見】

- いまの時代の子どもたちにとって、総合的な探求の学習は肝となるが、ある程度の人数規模がないと複数テーマの選択肢を与えることができない。
- 進学などで一度市外に出た子どもが故郷に帰りたいと考える大きな要因は小中学校の成功体験である。
- 統廃合においては小規模校・大規模校の双方の視点から配慮する必要がある。
- 人間関係の折り合いを勉強をするには、ある程度の人数規模が必要であり、また大人が規範性を見せないといけない。
- 学校規模の適正化のように教育環境を整えるということは、地域の環境を整えることと同義である。
- 国も府も幼児教育を重視している。
- 学校教員に必要な支援について、小規模校の先生方にどんな支援ができるか考える必要がある。先生を大事にする必要がある。
- 人口の動態がどのような変化しているのか、新生児がどれだけ生まれているか、乳幼児の人口も大事であるため分析が必要である。
- 幼児教育に力を入れて人口が増えた事例もあることから、子育てできる環境を考えていく必要がある。
- 教育委員会だけの問題ではなく舞鶴市全体的な総合的な計画の中で位置づけていく必要がある。
- 給食無償化も良いが幼児教育にも力を入れてほしい。

- こういった懇話会を繰り返す事が重要である。
- 特別支援学級を利用するような子供たちだからこそ、早い段階で今後の自分たちが生きていく社会になるべく近いようなコミュニティの中で育てていくことはとても重要である。
- 複式学級については特別支援学級利用者ほど影響が大きい。支えるのは現場の先生方なので教育環境が適正なのか目を向ける必要がある。
- 統廃合の影響を受けるのは子どもたち・先生方である。先生方の教育の環境を地域が後押しできるような風土があれば、モチベーションを持って関わっていただけるのではないか。
- コミュニケーション能力は集団のなかで形成されることから、小さい頃から適正規模で生活していくことのメリットはあると考える。
- 配慮すべき事項はどれも大切だが、とりわけ7ページ目（8）について事前調整の留意点は必ずしも合わせるのは小規模側からではない。小規模校がどう適応する視点だけではない。大規模校が変化しなければならないこともある。受け入れてもらう保護者側は、少しのことで大きな不安に発展しかねない。不安感心配事を双方の視点でみる必要がある。事前の調整は双方の調整である。
- 子どもたちだけに変化を求めるのではなく、我々大人も意識を変えて、保護者や地域も変化を受け入れることが重要だと思う。
- 子どもたちの意見を聞くことも必要かもしれないが、保護者が責任をもって正しい情報を子どもたちに伝える必要があると思う。そのうえで事務局はみんなが納得できるような話し合いの場を整えてほしい。
- 3ページ目の像について、親目線で自分の子どもを舞鶴に住ませたいかと考えたときに、現状は厳しいと思う。
- 高校卒業後に舞鶴市へ帰りたいたいと思える子供たちを増やすために、小・中学校の成功体験の機会を増やすPTA活動を実施する等、保護者も意識をかえて活動していく必要がある。
- 3ページ目の像についてビジョンの内容からは「ふるさと舞鶴を愛し」の部分が読み取ることができない。
- 学校は地域の拠り所であり、地域の特性を考慮し学校を守っていくという視点も必要ではないか。
- 高校卒業後9割は舞鶴を出て、戻ってくるのは2割を切っており母数が減っていく一方である。いかにして舞鶴在住時に舞鶴へ帰ってくるという意識付けが重要で、「舞鶴を愛し」を概要に組み込む必要があると考える。
- 切磋琢磨できるような子どもを育てないと大きな集団に入った際につぶれてしまう。
- 統廃合され残された学校の跡地はどうなるか気になる。
- 今は体育祭での練習も本番も静かである。地域に配慮をしなければいけない、活動が制限されているのが現在である。
- 地域コミュニティの中で一体化していかないといけないのに、教師が地域に大変気を遣っている状況である。
- ビジョンは教師目線が弱いと感じたので、教師目線をいれると良くなるのではないか。
- 4ページ目（3）の人間関係に配慮した学級編制というところを「人間関係づくりができる」としたい。

- 小規模校の一人の仕事量（どの学校も分掌は同じ）が多い。教員が多ければ分散される。
- 「人間関係」というよりも「人間関係づくり」は入れたいと思う。
- 4ページ目（6）について、総合的な学習でクラスを解体し、新しいグループを作ったところ、違う集団で目的を持って自分がしたいと思うことをすることだったから大変良かった。
- 学校では学期に一回挨拶運動をしているが、地域から注意の連絡が入りやり方を変えた例がある。時代とともに変えていかないといけないこともあると考えている。

【その他意見】

- 学校運営協議会がうまくいっている地域には祭りがある。コロナで行事がなくなってきたが、体験活動は子どもにとって重要。
- 今回の議論では、小規模でいいという意見はなく、ある一定の規模が必要だという議論が大前提となっているため、ビジョンを書く指針になる。
- 規模の適正化への取組に対し、舞鶴市はトップダウンではなく、地域とのボトムアップでいく考えていく体制なわけなので、これも指針から外せない。
- 小規模特認校制度を記載するのであれば、具体的な規模、地域を特定したうえで、うまくいく可能性があるというところまで記載しなければならない。そのための勉強が必要なので、次回の会議の冒頭にて、専門家の意見を聞きたい。
- 施設一体の小中一貫校をつくれれば解決する可能性はある。実際につくれるか等考える必要がある。
- 地域を発展させることには3つの要素がある。（1）子育ての仕組みが定着・発展しているか、幼児教育機関と教育委員会がつながれるような工夫が大事である。（2）地域の文化を校区ごとに検討する必要がある。（3）仕事がないとUターンすることができないことから働く場所の工夫は必要である。ただし、教育委員会の範疇を超えたレベルの問題なので、他部署等にも波及させる必要がある。
- 小規模特認校制度はメリットデメリットがあるため、いろいろな角度から検討する必要がある。
- 「同級生の存在」について、同じときに同じことを学んで、同じことで悩める人たちをこれからの子どもたちにも一定程度作ってあげていくというのも、大人の役割だと感じる。
- 統廃合のデメリット部分の意見としては、心情的なものが多数である。要は学校がなくなることに関する心理的に寂しい等である。しかし、仮に心情的な意見を除けば、防災の問題や、地域住民のコミュニティの維持など、教育への不安感というよりは地域への不安感になるので、それを教育委員会で払拭できるかは難しいことから、地域行政の自治体等々は、広い視点で課題を共有する必要がある。
- 7ページ目に書かれているような、教育委員会で地域のコミュニティ機能に配慮はできても、その維持は難しいのではないかと。教育行政のみで解決できることではない。やはり、地域行政全体で住民、災害、労働、暮らしのことをどんなふうにインフラとして考えるのか問題提起もセットであ

る。問題意識の共有が教育委員会にできる役割のため、中核となる子どもたち以外のことを配慮しすぎることに注意する必要がある。

- PTAの状況について、小規模校では同じ人が役員に何度もなったり負担が多く、また人も集まらない、会費が集まらないことから旅費等で実費負担せざるを得ない。一定の適正規模になればこうした負担についても変わるのではないか。
- 7ページ目のタブレット端末ICT関係でいえば、教室に入れない子が自習室でリモートで授業していた。教室と同等の効果があるどうか気になったの聞いてみたところ、音声がとんだり板書に移すことができないくらい画像が悪かったりしており、教科書を見て勉強していると話した。精度の高い機器を導入することも考えていただきたい。電波環境に左右されないということは重要である。
- 学校の先生は、地域からの苦情に萎縮することもあるだろうが、子どもの声で地域も元気になる。子どもたちを育てる観点から、むしろ遠慮せず地域を指導していただきたい。
- 舞鶴は転勤族をかかえている。子どもも、大学で市外に出たら戻ってきてくれない。自分のニーズにあった働く場が少ないのも要因となるのではないか。
- 複式学級の実例だが、他府県から転入してきた6年生の子どもについて、5年生のときに6年生のカリキュラムを学んでおり、5年生のカリキュラムが学べておらず、一部教科は5年生の教室に行くという特別な指導をしたことがあり、調整が難しい経験をした。
- 学校では、地域行事への参加を通じ、子どもたちの自己肯定感が上がった、いい効果が出ていると感じる。

(以上)